



目次

第一章 淫調教のはじまり

一

二

三

第二章 屈辱の穴奉仕

一

二

第三章 痴堕の穴修行

一

二

三

第四章 剥かれる人妻穴

一

二

三

第五章 穴奉仕の甘美なる墮落

一

二

第六章 鮮烈なる穴奉仕デビュー

一

二

三

四

法的拘束力を持つ重要事項および購入者同意契約

第一章 淫調教のはじまり

— 人里離れた雪原にポツンとひとつの温泉旅館がある。歴史ある豪壮な建物には白河屋と看板が掲げられていた。

雪が降りやんだ早朝、女将の白河美桜が露天風呂に向かう。住み込みの従業員が起きる前に湯加減を身体で確認する。

（もう春になるのに雪が……）

着物姿の未亡人は深呼吸した。吐息はすぐに白い霧となり、空氣に溶ける。白い足袋で廊下を進んでいくと、離れのひとつに到着した。

天然の露天風呂がそこにある。竹林に囲まれており、外部からは覗かれないうようになっていた。

「まだ寒いわねえ……」

ゆっくりと美桜は帯を解き出す。

肩口までかかる黒髪が妖艶に揺れる。濃紺の帯をそばにある竹かごのなかに入れて、襦袢の紐に手をかけた。ムチツとしたヒップが優美な曲線を描く。

ふと、視線を感じて背後へ振り向く。

（気のせいかな……）

廊下には誰もいない。

ホッと息をついて、襦袢を脱ぐ。ベージュのブラジャーに包まれた豊乳が重たげに揺れた。ガードルショーツの桃尻が露わになる。

風が吹いて、白煙が美桜を包む。裸になった熟女は前屈みになる。ポチャリと水音が響き、女体は湯に浸かった。

（この湯に入ると元気になるわ……）

白河屋に嫁入りして以来、ずっと入浴している。この湯が元気をくれると身に染みたのは夫が亡くなったときだ。悲嘆にくれる心身を癒してくれたのは、周囲の励ましと温泉である。

そのとき、背後から声をかけられた。

「義母さん、また一人で……」

「あつ、静香……アナタだったの……」

吃驚して振り返ると、義娘がバスタオル姿で立っていた。

白河静香は夫の博の連れ子で、高校生になったばかりである。何かと気にかけてくれる義娘を、将来は白河屋の若女将にしたい。そう考えていた。

彼女もまんざらでない態度を示している。近いうちに気持ちを伝えようと思っていた。

「おはよう……湯加減はどう？」

「いい塩梅よ。ぬるすぎず熱くもないわ。ジワツと体が温まる」

「そう、よかったわね」

左腕を乳房に巻きつけて、美桜は手招きする。

どんなときも柔和な笑顔と魅力的なボディーラインの女将として、白河屋のマスコットになっていた。一七〇センチの高い背にバスト九〇センチのFカップがピッタリ合っている。

全体のバランスに視線を惹かれるだけではない。

四十五歳とは思えない若々しい美貌、肉感のある丸い胸元、ウエスト六五センチの窄まりからヒップ九五センチのたるみのないヒップは垂涎モノだ。彼女目当てで宿泊する客も多いという噂があつた。

「気をつけて、義母さん」

周囲を警戒しながら、静香はゆっくり湯に浸かる。

「どうしたの？ 何かあつたかしら……」

にこやかに笑い、美桜は小首をかしげる。

「不用心すぎないかしら。この露天風呂はどこからでも覗けるわ」

「そんな不埒なお客様はいません。従業員もね……」

静香の注進を即座に否定した。

（今まで、この湯で問題が起きたことはないもの）

『白河湯』は男女の露天風呂の場所がすっかり分かれている。混浴ならばト
ラブルも起きるかもしれないが、その可能性をあらかじめ排除していた。

「何か心当たりでもあるの？」

それでも、義娘の言葉に耳を傾ける。

「まさか……あるはずないでしょ。不埒な男は全員死刑にするしかないわ」
眉を顰めて、静香は吐き捨てた。

ただ、と視線をさまよわせて台詞を継いだ。

「明日から春休みなの。一年生は強化合宿に参加しないといけないから……
行ってきたいいかしら？」

「もちろん……テニス部も大変ね」

このとき、美桜は得心がついた。

（この子、旅館の手伝いで悩んでいたのね）

朝から晩まで働く義母の姿を目にしていた静香は、罪悪感に苛まれていたらしい。去年は何も言わず遊びに行っていた彼女の成長がヒシヒシと伝わる。

「もうひとつ、お願いがあつて……」

「どんなことかしら？」

「新聞部の達也が悠馬と一緒に取材に来たいって。地元の有名旅館の女将に話を聞きたいらしいの。忙しいからダメって言ったんだけど」

目を少し紅くして、静香は言った。

「そう……いいわ。日時を連絡してくれば問題ないわよ。話と言っても皆さんがご存じのことばかりだと思うけど……」

不思議そうに微笑み、義母は柔らかに頷く。

（達也くんて……静香の幼馴染の……）

清水達也と悠馬は兄弟で、兄の達也は静香と同年だ。そして、二人はつき合っている和小耳に挟んでいた。ここは義娘の顔を立ててあげたい。

彼らの目的には触れず、美桜は静香と湯を楽しんだ。

二

静香が合宿に行つて二日後の昼。

「お忙しいところ失礼します」

征服姿で清水兄弟はやってきた。達也は精悍な体つき、鋭い目つきで頭を下げる。悠馬は正反对のお坊ちやまという童顔な印象が強い。

美桜は無地の紫色の着物姿で出迎える。

「ようこそ。白河湯へおいでくださりありがとうございます」

丁重に頭を深々と下げた。

（まさか、松の間を予約されるとは……）

インターネットで清水兄弟は父親と宿泊予約をしていた。期間は仮で三日間。こちらとしてはありがたい限りだ。

「今日はよろしく願います」

達也のほうで頭を下げる。悠馬の首には一眼レフカメラがぶら下がっていた。どうやら、弟はカメラマンに徹するらしい。

「どうぞ、こちらに……」

笑顔で女将部屋へ案内する。豪壮な檜の匂いが漂う廊下を二人は悠々と歩く。新聞部に似合わない迫力と存在感があった。

「ご要望については問題ないでしょうか？」

歩きながら達也が口を開く。

先導する美桜はチラッと振り返った。

「ええ。いろいろな写真と動画を撮影したいと……」

「はい。活字よりヴィジュアルのほうが印象に残りやすいんです。インパクトのあるモノを撮りたいんです。もちろん、お話もお聞きます」

「大丈夫です。企業秘密はありませんから」

ウフフフ、と未亡人は微笑んだ。

（彼らなら問題ないわ）

まさか、帳簿や顧客リストを撮影するとは思えない。旅館の魅力を発信してくれるなら、新鮮な彼らの視点でいろいろなものを発見して欲しい。

取材がはじまるまでは、そんな風に気楽に考えていた。

「アナタたちの好きなようにしてください」

「わかりました」と達也は無表情で返事をした。

女将部屋へ案内すると、達也は用意された座布団に座る。十畳の和室は青畳を交換したばかりで、フワッと青臭い香りがする。

黒い座卓に向かい合うと、悠馬が鞆から紙を出した。

「唐突な話で恐縮ですが……白河徹さんが亡くなられて、どれくらいになりますでしょうか？」

達也から話の口火を切った。

「ええと……十二年前でしょうか」

夫の話をされて、美桜の口調が重くなる。

（なぜ主人の話を……）

取材されたくない過去の苦い記憶だった。

「そうですか……この書類に見覚えはありますか？」

サラッと徹のことは流して、机上に紙を置いた。

「これは……」

美桜は表情を強張らせる。

それは借用書だった。眩暈がするほどの金額と必要事項は間違いなく夫の筆跡に相違ない。未亡人が手にしているのはコピーで、複製印が目映った。

字面を追うと、細かい記載の下に連帯保証人の名前がある。

「えっ！？ わたしと静香の名前が……」

一瞬、我が目を疑う。

（こんな話は聞いていない……）

生前、夫は旅館の老朽化した部屋をリフォームしている。その資金繰りについて、彼は貯金を切り崩して調達したから問題ない、と笑っていた。

現状、帳簿には借金の影も匂わない。

「どうやら、まったくご存じないようだ。まあ、無理はありません。突然死ですから……お悔やみ申し上げます。ただ、お亡くなりになったからと言って、借金は雲散霧消いたしません」

「そ、それはおっしゃるとおりです……」

プルプルと両手を震わせて、美桜は声を絞り出す。

ゆっくり頷いてから達也は非常な宣告をした。

「実は債権者の父が倒れまして……余命が長くありません。こちらまで面倒なことにしたくない。穏便に事態を收拾したいのです」

「そうなのですね……」

パニック状態の美桜は同意するのがやっとだった。

「まず、この金額を即金で用意してもらえますか？」

「無理です。それだけは……ああっ……」

反射的に悲鳴を上げてしまう。

「では、この旅館を差し押さえさせて……」

「それもダメですわ。うっ、どうしてこんな……」

できれば机に突っ伏して泣きじやくりたい気分だった。しかし、向かい合っている達也と悠馬を前に、そんな無様な真似はできない。

着物の裾を握りしめて、こみ上げる感情を抑えた。

「借金の返済は可能ですか？」

達也は美桜の様子にかまわず、冷静に言い放つ。

「時間をいただければ……」

「ふうむ。踏み倒されるのがなあ……」

「そうですね。時間を差し上げるかわりに、こちら担保をもらわないと……」

……

はじめて悠馬が口を出した。

「担保？ この旅館以外に……わ、わかりました」

旅館を奪われる恐怖に、未亡人は承諾してしまう。

兄弟がチラッと視線を合わせる。

「女将である白河美桜さん。アナタを担保にもらいましょう」

間髪入れずに達也が言った。

「えっ、わたしをっ……」

相手が何を言っているのか理解できない。不安と恐怖に打ちのめされ、ドクンツと心臓が脈を打つ。暑くもないのに額から汗が滲む。

自分を担保にして、何をするつもりなのだろう。

「担保とは……」

「換金できる性商品……穴奉仕です」

「そうなってもらうんですよ。まあ、いい値で売れる穴奉仕になってもらうと。具体的には今日から……」

「いやっ……あっ……そんな真似っ……できるはず」

顔を紅潮させて、背後にのけ反る美桜。

その狼狽ぶりに鬼畜兄弟はニヤリとポーカーフェイスを崩した。

三

「正気ですか？」

右手の甲を口元に当てて、未亡人は相手を睨みつける。普段柔らかな切れ長の目尻が吊り上がり、黒い瞳がウルウルと潤む。

「愚問だね。旅館を失いたくないだろ」

ガラッと達也の口調が変わる。詰襟のボタンを上から数個外して、座卓の上へ手招きする。まるでペットを呼ぶような素振りに腹が立った。

「これまでの会話は録音済み。これからの行為は録画するよ。さあ、座卓の上でストリップをしてもらおうか。簡単だよなあ」

悠馬は部屋の隅に三脚を立ててカメラまで設置した。

「いやっ、アナタたちにどうしてっ……」

厭々と美桜はかぶりを振る。

（穴奉仕なんて……普通じゃないわ）

怯えすくみそうになる心を奮い立たせた。人前で着物を脱いだことはない。そんな屈辱を味わうなら死んだほうがマシと思っている。

「旅館がなくなれば静香も困るだろう？」

「達也くん。アナタは静香と幼馴染でつき合っていると聞いています。恋人を不幸にしてもいいの！ わたしは……」

フンツと達也は鼻を鳴らす。

「話をすり替えるな。俺は静香の恋人ではない」

「どうして……」

「借金を回収するために付き合っただけだ。旅館の身代わりになるなら、観念しなさい。いますぐ金を取り立てないからさあ」

手持無沙汰そうに少年は腕を組んだ。彼の目は美桜の一挙手一投足をくまなく見つめている。

「くっ、ううっ、うっ……」

唇を噛んで、未亡人は顔をそらす。

なんとか逃れる方法はないものか。達也の話は嘘じゃないのだろう。それだけに始末が悪い。窮地を脱する手段へ思索を巡らす。

「あと三分以内に座卓へ上がらないなら、我々は引き上げる」

達也は悠馬に目配せした。弟は腕時計を見る。

「こんな重大な内容を……」

「俺たちは解決手段を提示済みだ。そちらの都合は関係ない。んっと、あと二分だね。二分でお立ち台に上がらなければ旅館はもらう」

悠馬はジッと腕時計を見つめていた。

（こんな真似……許せない）

彼らのシナリオとおりに動くよう時間で揺さぶられる。グルグルと様々な感情がごちゃ混ぜになり、美桜は何も考えられない。

絶対に屈しない。そう思い定めて、美女はそつと座卓へ上がる。

「これでっ……いいのねっ」

「そう。素直に従えばいいんだ」

上から目線の物言いも未亡人の神経を逆撫でる。怒りの剣幕で二人を睨みつけると、悠馬がカメラを回していた。

「じゃあ、ムラムラさせるように着物を脱げ」

微動だにせず達也は命令する。

「そんな脱ぎ方、知らないわっ……」

横座りの姿勢で、両脚をモゾモゾと擦り合わせた。

「貞淑美女だからな。俺が脱がせるよ」

「えっ、きやああっ……あっ……」

想定外の宣告に美女は座卓の両端を握る。

白足袋を脱がしてから、少年の手はふくらはぎを撫でてきた。指先の温もりが絹肌から伝わり、嫌悪感で胸が一杯になる。

「なめらかな質感。どれ、ナマの太ももは……」

達也は生唾を飲み込んだ。

「ああっっ、やめてえ……こんなっ、ううっ」

サツと濃紺の裾を手で押さえる。

「やめてもいいよ。乗っ取る旅館を拝んでいくから……」

冷酷な表情に戻り、少年はつぶやいた。

「そ、そんな！　これは痴漢行為だわ。わかつているの？　警察を呼びますよ」

横暴な真似に美桜は腹をくくる。

だが、少年の返事は用意周到だった。

「痴漢……じゃない。痴女だ。年増の美しい女将に誘惑されて、少年二名が強姦を受けた。少年は親子ほど年齢差のある学生……」

ハッと美桜は綺麗な臉を跳ね上げる。

「借金した家の息子を女将部屋に連れ込んだ美女。借金をチャラにする代わりに淫らなおもてなしで少年を籠絡……わかりやすいよな」

「俺たちは幼気な年齢だしねえ」

兄弟で警察への申し開きを話していた。

「卑怯者……っう、あっ、やつ……」

愕然とした美女の裾に、達也は手を忍ばせてくる。ムチツと熟れた脂の乗った太ももを優しく撫でてきた。

（コイツ、手慣れている）

触れるか触れないかの瀬戸際のタッチで、ねちっこく指先を躍らせてくる。さり気なく股を開かせて、少しずつ生地を捲り上げた。

「いやっ、恥ずかしいい……っう」

内股をピタッと閉じようとする。

すかさず達也は手刀を差し込んだ。中指がショーツ越しに秘裂に当たり、ピクンツと臀部が震える。少し太もを開くと手刀は引かれた。

「ぐっ、こんなっ……ふっ、ダメっ」

瞼を落として、美桜は股座をゆっくり開いた。

襦袢と一緒に着物が恥骨まではぐられていく。艶めかしい太ももが二人の少年の目を釘づけにした。

「ずいぶんシルキーな肌だな。ふうん、ベージュのショーツは完熟の肉感にはピッタリ。ムチムチと脂がついてうねっている」

「よしてえ……言わないでえ、うっ……」

生々しい台詞に全身の血液が沸騰する。膝頭を合わせて、裾を元に戻そうとした。そのとき、絹肌に熱い吐息を感じる。

側位にされた美桜のヒップに悠馬が潜り込んできた。

「無駄な抵抗はやめな。俺たちの穴奉仕になる運命を受け入れろ。そうすれば楽になれるんだ……」

「悠馬のいうとおりだ。まず、頑固な美桜をアクメに飛ばすぞ」

「ちよっ、ふたりがかりで……あふっ、そこいやっ」

横たわった女体がぐくねる。

（前後から襲われるなんて）

慌てて兄弟の頭を生地越しに押さえた。しかし、グイグイと鼻先を伸ばす勢いはとめられない。

「やっ、息を吹きかけないで……んんっ、あっ」

背後から不浄の穴に熱気の感触がこもる。太ももをシュルシュルと動かして、悠馬を押しつけようとすれば、達也がデルタゾーンに顔を埋めた。

「嫌がって不快がるのが、俺たちは大好物なんだ」

興奮を昂らせて、達也は太ももを丁寧に擦る。

「痴漢、変態、獣、あっ、はっ……んっ」

ついに兄は鼻先で陰核を攻めてくる。

（まさか……経験があるの！？）

ピタリと性感帯を捉えられて、美桜はグウの音も出ない。性欲盛りの四十歳の未亡人は勝手に反応する。

「ムツチムチのオシリも最高。触り心地がたまらない。あとで兄貴も楽しんでみなよ。こっちの穴は経験済みなのかな……」

夢見心地で悠馬は豊臀を撫でまわす。

「そんなわけじゃない。あうっ、もうよしてえ。いやっ、あっ、ふううっ、んっ……は、はああっ」

怒涛の勢いで臀部を攻められて、美桜は腰をよじらせる。巧みに生地をたくし上げられ、体の動きとともに鼠径部まで丸見えにされた。

（ううっ、粘着質な攻めを）

兄弟の愛撫は緩急がありタフさもあった。

特に悠馬の指遣いは達也よりしなやかで、尻たぶの外側と内側を撫でわけてくる。時間の経過で強張りを失った尻肉に、柔らかく指が沈みこんでくる。

「少しずつ甘い匂いと違う香りがしてきた」

ウフフフ、と悠馬は子供っぽく嗤う。

「気のせいだわ。あっ、汗よ……んんっ、ああ……」

すぐに美桜は反応する。

愛液と思われるのが癩だった。桃尻を揉みくちやにされておぞましさと嫌悪感で心臓が縮み上がる段階は終わった。異物感が薄れると、羞恥心に体が火照る。やるせない気持ちも混ざり、プライドが切り裂かれる。

「そろそろショーツを脱がそうか」

何気なく達也がつぶやく。

信じられない面持ちで美女は呻いた。

「馬鹿なことやめてちょうだい……んふっ、ああっ」

「馬鹿？」

達也の声色が変わる。

刹那、ビリッと灼熱の刺激が尻底から脳天に突き抜けた。生々しい感触に喘ぎ声を叫びそうになり、天を仰ぐ。両手で口元を押さえる。

「んっ……そこいやっ、ああ……よしとして、よしなさい」

甲高い声で少年ふたりを諫めようとした。

（アソコを……舌で刺激しないでえ）

ショーツ越しにペロペロと熟裂を愛撫してくる。蒸れるのを防止するため、クロッチを含めて布地は薄い。達也の舌先はネットリと花卉から閉じ目をなぞってきた。

「馬鹿にアヌスとオマ×コを攻められて、濡れるような穴奉仕に言われたくないよね。よし、一緒に引き剥がそう」

「やああっ、絶対にダメ。ああっ、アナタたちにはまだ早いわ。うっ、ちょっと、腰紐を緩めないでえ……やめなさい」

ビキニショーツの紐をほどかれて、美桜は動揺する。前後の布地の端を引っ張り取られまいと必死になる。

（簡単に見せられる場所じゃないわ）

夫の徹以外には見せたことがない聖域。女が一番恥ずかしい場所を披露できるのは恋人か主人だけだ。年端もいかぬ少年の好奇心に応える範囲を逸脱していた。

白魚のような指先が紅くなる。

「粘るなあ。オイ、二穴への刺激を強くしよう」

「うん……ゆっくり颯りたいんだけど……」

「何を言っているの！ あっ、んんんっ……」

キュウツと眉間に皺を寄せて、美桜は両手で口を塞いだ。艶やかな喘ぎ声の漏洩を防ぐので精一杯だった。

ふたりの舌先が二穴を直撃したのだ。生温かい柔肉がツウツと両環をなぞってきたとき、想像もしない衝撃が美女の内奥にこだました。

（やあつ、アソコが見られてしまう……）

恥じらいに美桜の体は燃え上がる。やがてジワツと汗のにじむ柔肌を涼しい空気がとおり抜けてきた。シュルシュルとショーツの布地が剥ぎとられ、宙を舞う。

「おおおっ、これは！」

「いやああつ……あつ、見ないでえ」

ふたりの兄弟は同時に雄叫びを上げた。その音圧が前後の穴に響いて、熟女の羞恥をさらに煽る。

悲鳴を上げて美桜は秘部を隠そうとした。

「あつ、ぐううっ、はああつ……んっ、うっっ」

両手を下げる前に、女体は見苦しいほど引き攣る。紅い衝動が膺の裏にやってくる。バチバチと火花を散らした。

（クリトリスはっ……）

陰核をカプツと甘噛みされた。唇でコリコリと横腹をなぞり、性感のこもった声をいなく。吐息で誤魔化しきれない官能のしなりが甘く部屋へ染み渡る。

胎内で収納しきれない心地が溢れて、ふたりの髪の毛をつかんだ。

「気分が乗ってきた感じだな……美桜」

「なにをいっているのっ、そんなわけっ、はっ、んっ……やっ、あっっ、んんふっ……んんぐっ」

相手の思いとおりになるものか、と美桜は睨む。これは単なる生理反応。刺激を受ければそれだけ生殖器は応答を返す。

そう反論しても、ふたりは嗤うだけだった。

「一度イカせよう、兄貴」

「そうだな……アクメに飛んだら頑固な態度が少しは変わるだろう」

「やっ、激しくしないでえ、あっ、あんっ……」

バツと美しい小顔が跳ね上がる。髪留めが部屋の隅に飛んで、艶々の黒髪が妖艶に濡れ広がった。

（今度は前後から緩急のある攻めを……）

パクパクと唇を噛んで、美桜はブルブルと小顔を振った。

「あぐっ……ひあっ、あああっ」

「ククク、気持ちいいわって顔に書いてあるぜ」

「ちがうわ、これは……あんなっ」

前後の淫環を舐め立てられる。チグハグな舌のリズムがラビアとアヌスをネットと濡らした。そのあいだ、達也の指が陰唇を往復し、悠馬の掌が尻房をゆつくりと撫でまわす。

「んっ……そこっ、やつっ、あっっ、っんっ」

緻密な舌の軌跡に無反応ではいられない。

懊悩に美貌を歪ませて、プルプルッと臀部が引き攣る。はしたない応答に兄弟はそろって嗤う。さらに舌で両穴を抉ってきた。

（ああっ、ダメッ……イクッ）

豊満な肢体で抑えきれない性感が、みるみる波頭を高くする。やがて、溢れる情欲が快楽神経になだれ込み、美桜はブルウツと総身を慄かせた。甘美な灼熱に磨き込まれた昂りが爆発する。

「んっっ、あっ、はんんんっっ……ああんんっっ」

淫らに腰をうねらせて、美桜はヒップをクネクネとくねらした。大きな脈動がビクンッ、ビクンッと未亡人を狂わせていく。

「いい反応だな：：イッたのか？」

「はあっ：：イッてません、アナタたちに：：んっ」
頑なに美桜は拒否した。

「やれやれ、頑固な女だな：：」

ゆっくりと達也は右手を膣に挿入してくる。陰毛のなかで女肉が潤む。馴染ませる指遣いに、未亡人の顔が引き攣る。

（この子、女の体の扱いを知っているみたい）

年齢に似合わず、少年の手練手管に舌を巻く。彼らは女性器をどう刺激すればいいのか熟知していた。

「とりあえず、服を脱げよ」

命令を聞き入れない態度に苛立ったのか、達也は右手の指先をプルツと小刻みに振動させた。

上半身を起こした美桜のヒップがふたたび跳ねる。

「やっ、なにをっ、んんっ」

数秒後に怒涛の刺激が蜜口でうねった。

「仕方ない。俺が着物を脱がせるよ」

悠馬が背後にまわりこみ、ため息をつく。

「いやっ、アナタたちに……見せても仕方ないじゃない」

「穴奉仕が口答えするな」

達也はクリトリスの裏口でブルツと中指を痙攣させる。

「はっ、んんっ……」

鎮まりかけた女欲が昂りだす。

「セカンドバージンにしては感度がいいな」

感心したように兄貴は指を手繰る。

そのあいだ、シュルシュルと淫靡な布ずれの音が部屋に響いた。帯留めから紺の帯まで、悠馬が丁寧に未亡人の皮を剥いでいく。

（あっ、アソコがジンジンして……）

脱衣をやめさせようとするが、膣口を鉤型の指先でクイクイ引き伸ばされると、そちらに神経が集中し抵抗できない。

「いい匂いだ」

背後から悠馬が髪の毛の匂いを嗅いでくる。

「やめてっ、うなじに近づかないで」

「嫌がると燃えるんだよな……これが……」

帯を解きながら、黒髪が搔き分けられた。左に寄せられて、白い首の右側に鼻先が近づく。

「あうっ、耳たぶを舐めちゃいやっ」

「ケチケチするなよ。旅館がなくなるぜ」

弟の口調が兄貴に似てくる。

屈辱に歯噛みし、美桜はギュッと瞼を閉じた。モゾモゾと体を動かすと、清楚な着物姿がふしだらに崩れていく。

「……くっ、んんふっ……あっ、くあっ……」

「エロい顔になってきた……牝の匂いも濃いし、けっこう飢えているのかな。フッフ、エロ声でいくら鳴いてもいいんだぜ」

「誰がそんなみつともない真似をしますか！　ただ、旅館のためにわたしはっ、ひぐっ……っく、んあっ」

「少しは状況を理解してきたか」

達也は声を弾ませた。右手の親指で叢越しに陰唇をゾロツと愛撫する。同時に中指がラビアまで引っ込み、蜜汁を擦りつけた。

（ああ、アソコと同時に耳のなかはいやっ……）

今度は悠馬が積極的に攻めてくる。

恥じらいに震えるうなじから耳たぶまで、ネットリと舌先でなぞってきた。クンツと顔を上げれば、鼻先でスンスンと匂いを嗅いでくる。

「甘ったるい匂いは発情の証だろ？」

「ちがうわ。勝手に体が反応しただけよ」

無礼なさきやきに、美桜は強い眼差しを向けた。

「ほおお、まだ戦意喪失していないのか。強気な熟女はそそるな。ゾクゾクしちゃう……」

悠馬は童顔の目を細める。

（ああ、このままでは……）

美桜にとって素肌を男に晒すのが一番嫌だった。清廉で純潔な身の証は、普段の振る舞いや恰好にある。未亡人にとって、身も心も捧げるのは亡き夫の徹以外ありえなかった。

「着崩れる姿もエロいなあ。そろそろブラジャーとご対面か」

ゴクリツと達也が生唾を飲んだ。

「ダメツ、あつ……つく、ううつ……」

スルスルと着物の襟が流れていく。悠馬の手によって、襦袢の紐留めまで外されてしまっていた。淫猥な布ずれの音とともに絹肌が露わになる。

急いで着物の襟を胸元に上げようとした。

「おっと、今さら無駄な抵抗はよしな」

「あつ、はあつーんんっ……あつ、はっ……」

チュウツと達也が肉真珠に吸いついてきた。同時に膣内に指が二本穿ち込まれる。爛れた秘粘膜を掻き混ぜられ、陰核の根元を裏から刺激された。

体を真つ二つにされる衝動で、美桜の脳髄は痺れきる。後ろ手について、悶える上半身を支えるのがやつとだった。

フアサツと着物が襦袢と一緒に開けて、襟元が座卓に落ちる。

「ほおおっ……これは」

兄弟そろって歓声を上げる。

「んはっ、あつ、見てはいけません。やあつ、うっ……」

悲哀を込めて、美桜はブンブンと顔を振った。バサバサと黒髪が靡いて、露わになった白い肌を隠す。その隙間から覗くフルカップブラジャーのふくらみに、矢のような視線が刺さった。

「おい、これはシャッターを切れよ」

「そうだな。記念写真だ」

「えっ、そんなっ……やああつ、あつ」

へばりついていたふたりがサッと美桜から離れる。

直後、悠馬はシャッターボタンを押しまくった。白いフラッシュがビデオカメラから焚かれて、未亡人は啞然とする。

悲劇はさらにつづく。

「エロいなあ……今すぐしゃぶり尽したいな」

「こんなオッパイを隠していたとは……犯罪だな」

「……勝手に写真をつ、やめてっ、あっ、いやあああ……」

ビデオカメラへ両腕を伸ばした矢先、プツンツとブラジャーのフロントホックが外れる。想定外の事故に、美桜の理性は追いつかない。両手でパッドを押さえようとしたとき、閃光を浴びる。

クネクネと体を動かしているうちに、女体から衣が離れていった。

「おおっ、ヘアヌードだぞ」

「わかってているよ、ホラ！」

「やめてっ、あっ……ああっ……」

一糸まとわぬ裸体となった瞬間、シャッターが切られる。左腕を乳房に巻きつけようとする前に、白い光が触れてしまった。

「決定的瞬間が撮れてよかった。この写真を新聞部の一面にすれば、男子生徒は全員チ×ポがビンビンになるだろ」

「美桜の穴を使いたいわって奴が旅館に殺到するかもしれないな」

「なんてことを……うぐっ、ぐすっ、うっ……」

儂げな面持ちでうつむいて、美桜は嚙り泣く。左腕で巻きつけた豊乳はこぼれ落ちんばかりのボリユーム感がある。細腕で隠せない下乳の丸みは、年齢不相応に弾力性を保持していた。

「冗談は置いといて。ようやく脱衣まで終わったな」

「うん。次はハメ撮りにする？」

「そうだな。悠馬、やりたいんだろ……」

「いいよ、俺はジックリ楽しみたいし」

「アナタたち、何を話しているの！？　もう、これで終わりじゃないの……」

鼻声で美桜はなじるように叫んだ。

（こんな恥辱……もういやっ）

年端もいかぬ少年に大事な素肌を見られてしまい、舌を噛み千切りたいほど恥ずかしい。おまけに秘穴まで弄ばれたのだ。

「終わり？ いや、それは冗談にならないな」

「ようやくスタートラインなんだ」

ふたりの少年は目を爛々と光らせていた。

く続きは本篇でお楽しみください

法的拘束力を持つ重要事項および購入者同意契約

本文書は、成人向け官能小説作品（以下、「本作品」という）を公開・販売するにあたり、著者（以下、「当方」という）と購入者（以下、「貴殿」という）の間で締結される法的拘束力を持つ同意契約です。本作品の購入、ダウンロード、閲覧、またはその他の方法でのアクセス行為により、貴殿は本免責事項の全条項に完全かつ無条件に同意したものとみなされます。同意できない場合は、本作品の購入・閲覧を直ちに中止してください。

一年齢制限および法的確認

本作品は日本国内法において成人と認められる18歳以上の者のみを対象としています。

本作品の閲覧・購入により、貴殿は自らが法的に成人年齢（18歳以上）に達していることを宣言・保証し、これに虚偽があつた場合のすべての法的責任を

負うことに同意するものとします。

貴殿は、本作品を未成年者に提供・共有・販売・貸与しないことを誓約します。

貴殿は、本作品の閲覧にあたり、貴殿の居住地および閲覧地の法令で成人向けコンテンツの閲覧が許可されていることを確認し保証するものとします。

二 コンテンツの性質および免責

本作品には、明示的な性的描写、成人向けの要素、およびその他センシティブな表現が含まれています。

本作品に登場するすべての人物、場所、団体、事件、状況は完全なフィクションであり、実在の人物（生存者・故人を問わず）、団体、事件、場所とは一切関係ありません。いかなる類似性も偶然の一致であり、意図的なものではありません。

本作品で描写される行為、状況、関係性は、現実世界における法的・倫理的・道徳的価値観を反映するものではなく、また推奨・奨励・助長するものでもありません。

本作品は芸術的・文学的表現の自由に基づく創作物であり、表現の自由を保障する憲法その他の法令により保護されています。

貴殿は、本作品の内容が貴殿の想像力を刺激し感情を喚起する可能性があることを認識し、それらに対する対処は貴殿自身の責任であることに同意するものとします。

三 個人の感性と判断の完全責任

性的表現や官能的描写に対する感じ方は個人差があります。貴殿は完全に自己責任において本作品を閲覧するものとし、その判断と結果について当方は一切の責任を負いません。

貴殿は、本作品の内容が貴殿の個人的価値観、信条、宗教的・道徳的・倫理的信念に合致しない、または挑戦的である可能性があることを明確に理解し、それにより生じる精神的・感情的反応について当方に責任を求めないことに同意するものとします。

貴殿は、作品内容に不快感や心理的動揺を覚えた場合、直ちに閲覧を中止することが貴殿自身の責任であることを認め、これを怠ったことによる結果について当方に一切の責任を求めないことに同意するものとします。

貴殿は、本作品を閲覧することによって引き起こされる可能性のある感情的、心理的、または精神的影響について当方が責任を負わないことを明示的に同意します。

四 販売プラットフォームの規約と購入形態

本作品は、各販売プラットフォーム（note、DLsite、FANZA、その他EPUB形式で配信するプラットフォーム）の規約に準拠して制作・販売されています。貴殿は、プラットフォーム固有の利用規約および制限事項をすでに確認し理解したことを確認するものとします。

貴殿は、本作品がもともnoteで公開された記事をEPUB形式に変換・編集して販売されている場合があることを理解し、それによる内容の差異や形式的特性について異議を唱えないことに同意するものとします。

貴殿は、購入後のEPUBファイルの管理は完全に貴殿の責任であり、ファイルの紛失、破損、または意図しない拡散について当方は一切責任を負わないことに同意するものとします。

五 著作権および厳格な利用制限

本作品のすべての内容、テキスト、キャラクター、設定、ストーリー、アートワーク、およびその他の創作的要素に関するすべての権利（著作権、商標権、その他の知的財産権を含む）は、完全かつ排他的に当方に帰属します。

貴殿は、以下の行為を明示的に禁止されることに同意するものとします..

本作品の全部または一部の複製、再配布、転売、貸与

本作品の全部または一部の公開朗読、朗読配信、公開上映

本作品の翻訳、翻案、改変、二次創作、派生作品の作成

本作品の内容に基づく商品化、グッズ制作

本作品を利用したエー学習、データベース構築、テキストマイニング

本作品の全部または一部をSNS、ブログ、メッセージアプリ等で共有することその他、当方の権利を侵害する可能性のあるあらゆる利用

貴殿は、本作品を個人的に楽しむ目的でのみ使用できるものとし、それ以外のいかなる目的での使用も厳格に禁止されます。

上記の制限に違反した場合、当方は法的措置を含むあらゆる適切な手段を講じる権利を留保し、貴殿はそれによって生じた法的費用を含むすべての損害の賠償責任を負うことに同意するものとします。

六 完全な責任免除および法的保護

当方は、本作品の閲覧、使用、または本作品へのアクセスができないことに起因して生じたいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、懲罰的、または派生的損害（心理的・精神的被害、評判の損害、事業の中断、データの喪失、利益の損失を含むがこれらに限定されない）についても、たとえそのような損害の可能性について当方が知らされていた場合であっても、一切の責任を負わないものとします。

本作品の解釈、内容理解、および閲覧後に貴殿が取る行動や受ける影響については、完全かつ排他的に貴殿自身の責任であり、これに関連するいかなる請

求からも当方を免責・防御・保護することに貴殿は同意するものとします。

貴殿は、本作品に関連して第三者から当方に対して提起されるいかなる請求、訴訟、要求、費用、責任、および支出（合理的な弁護士費用を含む）についても、貴殿の本免責事項違反から生じた場合、当方を防御、免責、および損害を与えないことに同意するものとします。

適用法で許可される最大限の範囲において、当方の総責任額は、貴殿が本作品に対して支払った金額を超えないものとします。

一部の法域では特定の保証の除外または責任の制限を認めていないため、上記の制限の一部は貴殿に適用されない場合があります。しかし、法律で許可される最大限の範囲で制限が適用されるものとします。

七 プライバシー、セキュリティおよびリスク認識

貴殿は、本作品の購入・ダウンロード・閲覧履歴が個人のプライバシーにかかわる機密情報であることを認識し、これらの情報および本作品のファイル自体の管理は完全に貴殿の責任であることに同意するものとします。

貴殿は、共有デバイス、公共の場所、職場環境、または第三者がアクセス可能な環境での本作品の閲覧・保存に伴うすべてのリスク（社会的評判、雇用関係、人間関係への潜在的影響を含む）を完全に理解し、そのようなリスクから生じるいかなる結果についても当方が一切責任を負わないことに同意するも

のとします。

貴殿は、インターネット通信、クラウドストレージ、デジタルデバイスに固有のセキュリティリスク（ハッキング、不正アクセス、マルウェア感染、データ漏洩など）を理解し、本作品の購入・保存・閲覧に関連するそのようなリスクについて当方が一切責任を負わないことに同意するものとします。

貴殿は、本作品の EPUB ファイルまたはその他のデジタル形式が、技術的な問題、互換性の問題、またはデバイスの制限により正しく表示または機能しない可能性があることを認識し、そのような技術的問題について当方が責任を負わないことに同意するものとします。

八 問い合わせと紛争解決

本作品に関するご質問、ご意見は連絡先までお寄せください..

当方は問い合わせに対する回答義務を負わず、回答の有無、内容、タイミングはすべて当方の裁量によるものとします。

本免責事項または本作品に関連して生じるいかなる紛争も、日本国の法律に準拠するものとし、地方裁判所を第一審の専属的合意管轄裁判所とします。

九 可分性と完全合意

本免責事項のいずれかの条項が無効または法的強制力がないと判断された場合でも、残りの条項は完全に効力を維持するものとします。

本免責事項は、本作品に関する貴殿と当方の間の完全な合意を構成し、書面または口頭を問わず、本件に関する以前のすべての理解、合意、表明に優先します。

本免責事項は、当方の書面による明示的な同意なしに変更または修正することはできません。

十 承諾と効力発生

貴殿は、本作品を購入、ダウンロード、閲覧、または他の方法でアクセスすることにより、本免責事項をすべて読み、完全に理解し、法的拘束力のある合意として無条件に同意したことを認めるものとします。

本免責事項への同意は、貴殿による本作品へのアクセス時点で効力を生じ、永続的に有効であり続けるものとします。

法的通知… 本免責事項に同意せずに本作品にアクセスした場合、著作権法違反および契約違反となり、法的措置の対象となる場合があります。同意できない場合は、直ちに本作品の閲覧を中止し、すべてのコピーを削除してください。

本免責事項に同意された上で、作品をお楽しみいただければ幸いです。

最終更新日：二〇二五年三月二十九日

著者名：宇佐見翔